

『稿本天理教教祖伝』の第1章は、中山みき様がお生まれになった時から始まるのではなく、親神・天理王命が中山みき様に最初に天降られた時から筆を起こされています。

その理由の第1は、啓示宗教としての本教の立場を明らかにすることであり、第2は、教祖の「ひながた」が、中山みき様が月日のやしろになられてからの50年であることを明示することです。

つまり、天理教は、寛政10年(1798)に生まれられた中山みき様が、修行などをして自らの宗教的天性を磨いて開教されたのではなく、天保9年(1838)に、親神・天理王命が、中山みき様に入り込まれて始まった教えであることを明示しているのです。換言すれば、中山みき様がこの世に姿を現しておられた90年間中、前半の40年間は人間中山みきとしての年月であり、後半の50年間こそが、「月日のやしろ」としての年月である。それが、私たちが「ひながた」として慕いたどるべき道すがらであるということです。

さて、この立教の時の状況をもう少し詳しく述べてみますと、親神様のお働きが、中山家に最初に現れたのは天保8年であります。つまり、立教の1年前に、中山家の長男秀司様の足の痛みという形で、親神様の意思の最初の発現があったのです。

そして、「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり、このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい」との親神様の最初のお言葉が出たのは、天保9年10月24日の朝でありました。

それから、26日までの足かけ3日にわたっての押し問答の末、「みきを差し上げます」と、夫の善兵衛様がお答えになりました。そして、この善兵衛様が承諾の意を示された天保9年10月26日をもって、本教の立教の元一日としているのです。つまり、親神様のお働きが中山家に最初に現れた日や、そのお言葉が最初に下がった日が立教の日ではなく、人間の方が親神様のお申し出をお受け・承諾した日を、天理教の始まりの日としているわけです。

これらの一連の流れを、「ひながた」をたどる我々の立場から考えてみますと、自らの入信の元一日たる日は、理の親・布教師などから最初に声をかけられた日ではなく、その声かけ・においがけに応じて、自らがこの道の信仰をする決心をした日であるということです。

身上の悩みや事情のもつれでこの道に引き寄せられ、理の親においをかけられる。しかし、それでもなかなか信仰を始め決心がつかない。というのが、中山家の方々为天保9年10月24日から26日の朝までに過ぎられたのと同じ状況であります。中山家の方々とは3日で入信を決断されるのですが、普通の者の場合は、その状態が半年も1年も続く。中には何10年経っても心が決まらず入信しない人もあります。あるいは、また、義理や付き合いで教会に出入りしていても、心底から道を通る決断をしていない人は、いわば、何時までも10月26日を迎えない人であり、したがって、親神様との関係も宙ぶらりんのままということになるわけです。

このことは、信仰の2代目、3代目にも当然あてはまるわけで、親が信仰しても子供が自動的に信者になっているのではありません。本人自らが道を通る決心をして、信仰に基づいた日々

を通るようにならなければ、本当に入信しているとは言えないのです。

さらに申しますと、親神様のお言葉に接したならば(においをかけられて入信のさそいを受けたならば)3日以内に入信の決意をするのが理想である。中山家の最初のように、3日くらいは逡巡しても、その後は一身一家の都合を捨てて親神様の仰せに従うことができる人が、人間として一番“清純なたましい”を持っている人だといえるのではないかと思うのであります。

さて、しかるに、この立教の時の親神様と人間のやりとりについて、もう少し詳細に『稿本教祖伝』を読んでみますと、「みきを神のやしろに貰い受けたい」との親神様の要請は、みき様ご本人に対してではなく、夫の善兵衛様をはじめとする家人・親族に対してなされていることに気がきます。それは何故か?

私見を申せば、中山みき様には、神のやしろとなるべき魂のいんねんが最初からあったわけで、ご自身の立場は既に決まっていることであつた。しかし、他の方々とはみき様とは同じ立場ではなかったの、(人間に心の自由を与えられた原則に則して)それぞれの意志を尊重して、承諾を得る手続きを踏まれたのだと考えられるということです。(もともと、中山家のご家族の方々とは、つとめ人衆になられるべき魂を持っておられたのですが…)

この立教の時に立ち会った人々の立場・役割から思案できるのは、入信というのは、人間の側から言うことであつて、その当人を神の用向きに使うとされるか否かは、あくまでも親神様が決められることだということです。人間には“心の自由”が与えられており、そのために、親神様の思し召しに素直に従わない時があるかも知れませんが、しかし、究極的には、

このききらうかあおいしと

おもへどかみのむねしだい (「みかぐらうた」八下り目九ツ)と、「みかぐらうた」に歌われているように、どんなようぼくを引き寄せられるのも、実は親神様の思いのままなのです。つまり、ようぼくとして使われる本人には、親神様に見出されるという魂のいんねんがあるのであつて、そのことについて、本来的には本人が否応を言える立場ではないのです。

例えれば、ようぼくとは、陽気ぐらし世界へ向かって流れる川に浮かぶ舟の船頭のような存在です。船頭としては、乗船した客たちが流れに逆らって進むことを希望すれば、その思いを無視することができない時もありましょう。また、船頭自身も周りの景色に見とれたりして、舟を止めてしまうこともあるかも知れません。しかし、親神様から陽気ぐらしへの流れを進む船頭として見出されたかぎりには、最終目的地まで乗客を案内していく責任があるのです。

また、別の例えでいいますと、ようぼくは、陽気ぐらし世界建設のために、親神様によって山から切り出された用材です。そして、その用材にはそれぞれの持ち場・立場があります。床柱用にと見込まれて切り出された木が、そんな目立つところで使われるのは嫌だという。あるいは、床下の土台にと期待されて切り出された木が、そんな目立たない所で重荷を支えるのは嫌だという。それでは、それぞれが用材として切り出された意味がなくなってしまう。 “ようぼくの私より、世間にいる友

(13頁へ続く)

(3頁からの続き)

人の方が生きいきとしている”などと嘆いている人がいますが、それは、切り出された用木は、まだ根のある山の木とは違うということ。用木は期待される役目を果たすために、手入れもされるし磨きもかけられる。しかし、それを嫌がり拒否していれば、やがては打ち捨てられ、根がないので朽ちてしまうことになるのです。

しかるに、一方、必ずしも全ての人がよくになるわけではありません。ですから、自分がよくになるについての承認と協力を、家族や身近な人たちから得ることが必要になるのですが、それを得ることが容易でないことも、また、「ひながた」に示されているところなのです。

(4頁からの続き)

[補] 本連載 32 「その他の地域の海外伝道」でメキシコの天理教を書いたが、以下のように若干の補正を加えたい。

名古屋メヒコ教会を設立した安藤ペレス・せつ子は絵の勉強でメキシコに渡る前、名古屋大教会で森井敏晴会長（当時）から信仰の仕込みを受けた。森井会長から絵の勉強だけでなく、おたすけにメキシコへ渡るんだと、海外伝道への熱い思いを聞かされた。それは森井会長が二代真柱から教えられたことでもあった。メキシコでの安藤は美術学習とともに布教活動に勇躍し、大勢の若者をようばくに育てた。

(5頁からの続き)

けて死んだときに、そのながした血によって洗礼されて殉教者となる血の洗礼や火の洗礼などがある。天理教では殉教者という意識がそもそも不在であるから、それに対する儀式も不在である。しかし「みかぐらうた」の「いっせんにせんでたすけゆく」（九下り目の一）を「一洗二洗で助け行く」と漢字の訓読み表現をした場合（『おかぐらのうた』上田嘉成、天理教道友社、545頁、『みかぐらうた・おふでさき』村上重良校注、13頁）は、やまとことばではなく不自然で、くわえて天理教にも洗礼儀式があるのではないかと未信者には誤解されるおそれがないとは言えないであろう。筆者の「せん」論はやまとことばの多義性に触れて幕末の貨幣論から別項でおこなう。

(7頁からの続き)

くない。留学経験者と配偶者は、天理移民同様、ブラジルの天理教の「日系人化」を維持させる要因になったとみられる。また、同じ世代にはブラジルに移住して会長になっている日本人が7人おり、彼らも「日系人化」を強化しているともいえる。

しかし、その一方で、子弟世代は日本で「ブラジル人」アイデンティティを強く意識するようになっている。学生生徒講習会は子弟世代が企画しており、ブラジル人の感覚に合うように進められ、関心を高めている。このようにブラジルの天理教では「非日系人化」への模索が始まっている。

(10頁からの続き)

またもや行進中にストップ

7月27日午後7時、シチリアのパレルモで、カルメロ派の聖母マリア像の行進が、ポンティチェッロ通りの葬儀屋の前で、中年男の「生まれ」の一声でストップ。その葬儀屋というのは

マフィアのボスの経営だ。そのボスは捕らえられていて、北のノバラの刑務所に1年半も収容されているのだが、彼、アレッサンドロ・ダンブロージョは今40歳だ。

同じような事件があつてからまだ1カ月も経っていない。それは7月2日、イタリア半島の南のレッジョ・カラブリア州のオピード・マメルティーナで、自宅監禁の罪に問われている「ンドランゲータ」のボスの家の前で「恩寵の聖母マリア像」が、行進中にストップして、「お辞儀」をしたというものだ。その後、その時のマリア像の担ぎ手の25人が調査によって、7月9日に明らかにされた。その25人の中の一人は、「我々は『ドラングエータ』の二つの異なったグループに属し、神輿の前後に分かれている。しかし対立関係にあるのではなく皆友達だ」と語っている。

1800年代より「信仰会」と言う名目の小集団がシチリアではたくさん結成されていて、その実態はなかなか把握されないうでいた。例えば、このアレッサンドロ・ダンブロージョはカルメロ山の聖母マリア信仰会の信仰深き尊厳者と見られていた。地元の検事フランチェスコ・メッシオネは「この出来事は、この地区の日常生活に暗い影を落とした不幸な出来事である」と言及した。残念ながらマフィアのサブカルチャーは未だ生き残っているのだ。警察や陸軍警察の告発、逮捕そして内部告発にもかかわらず、事件のあったパレルモのパラロー界限では、40代のダンブロージョは、若者の間では神話的人物である。それは甥のフェイスブックへの次のような投稿でも読み取れる。「彼は我々全員の誇りである。」「彼は唯一者であり、特別者である。」この一連の出来事に、地区の神父ヴィンチェンツォは「不意の停止だった」「今年もまた起きてしまった」と呟いていた。枢機卿パオロ・ロメオはその行進のために代表団を送っていたし、ヴィンチェンツォ神父は「信仰会」のリストを要求されていた。事件のあった当日は枢機卿より特使も送られていたのだ。マフィアたちはこの「信仰会」を隠れ蓑にするのか、聖母マリア像の行進に非常に熱心だし、毎年復活祭前の聖金曜日の重大な聖行進を企画するのだ。これらの出来事はヴァチカンに苛立たせている。ヴァチカンの仲介は厳しさを増し、マフィアの介入を防ぐために「信仰会」の解散を求めている。

比較思想学会でパネル発表

金子 昭

比較思想学会第41回大会が7月20日、島根県松江市の中村元記念館で開催された。8本の個人研究発表、パネルディスカッション及びシンポジウムが行われた。私はパネルディスカッション「思想としての生命 第1回『出生と生命』」の部にパネリストとして発題した。パネリストとそのテーマは次の通り（発題順）。田中かの子・駒澤大学講師「いのちの『ありのまま』を引き受ける、という原則からの一考察」、安藤泰至・鳥取大学准教授「この世に生まれてくること—生命操作の時代のなかで—」、金子昭「人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み—」。コーディネータは沖永宜司・帝京大学教授がつとめた。